



今、私の手に一つの小説文がある。愛知淑徳の教員になりたての頃、失敗をして落ち込んでいる私に、当時の

副校長、加納先生が「頑張りなさい」と手渡して下さったものである。それは教員採用試験の時に私が書いた「理想の教師像」という小論文である。大学卒業後、母校の一宮高校で1年、高蔵高校で5年、専任教師になる事をめざし非常勤講師を務めていた。当時、保健体育科はもちろんのこと、教員の採用がとてもなく、

教員をめざす者にとっては大変な時代であった。多くの採用試験を受けるものの結果が出ず、毎日不安を抱え生活をしてきた。29歳の時に愛知淑徳の採用試験がある事を聞き、これが最後のチャンスだと必死に勉強して受験した。この小論文も教員になりたいという気持ちを十二分に込めて書いた。面接では土下座をしてお願しようかとも思ったが、それは出来なかつた。それほど採用を熱望していたのだと思う。

12月に採用の通知を頂いた時の嬉しさは今も忘れることはできない。自分の事を認めてくれた愛知淑徳に感謝し、この学園に一生を捧げようと強い決意に満ちていた。

愛知淑徳に採用していただいていたから今年が20年目になる私、伝統あるソフトテニス部顧問を務め、山本宗秀先生、加藤繁武先生から多くの指導をいただいた。多くの部員にも恵まれ、「人間として」「淑徳生」として、どうあるべ

きかをソフトテニスを通じて常に教えてきた。インターハイをはじめとする多くの全国大会にも出場し、良い思い出もたくさんある。「生徒をやる気にさせる」。これは教える上で一番大切なことであるが、私は愛知淑徳が大好きで、生徒を愛し、自分が燃え、そして生徒を燃えさせる。一生懸命に頑張っている生徒を認めてあげることこそ、生徒をやる気にさせる秘訣だと私は思う。これは若いころ認めてもらえずにやる気をなくし、愛知淑徳に採用されて認めてもらえたことでやる気になった、自らの経験で学んだことである。これらの経験は他の場面での指導においても大いに役に立っている。自らの経験で感じ学んだことこそ、教育の基本となるのだと思う。

愛知淑徳学園は今年で110年目を迎える。私が採用された頃と比べても、学校は随分変化した。校舎も建て替えられ、中高完全一貫体制にもなった。学園広報誌「随想」の原稿依頼を受け、ふと思えば学校の中でも中堅に位置し、学年主任や生活指導部長を任される年齢となった。今までは自分のことで精一杯であつたが、今は若手の教員にもいろいろ教えていかなければならない立場である。教員生活の折り返し地点を過ぎ、愛知淑徳の教育理念である「淑徳魂」「10年先、20年先に役立つ人材を育てる」「伝統は、たちどまらない。」のもと、これからの新しい愛知淑徳をみんなで創つていかなければならないと思っている。

この小論文は私の宝物である。今後も何度も読み、「初心」を忘れず、努力し続けたい。最後に、いつも私を支えてくださる教職員のみなさんと多くのことを学ばせてくれる生徒に感謝し、文を締めたいと思う。